

居場所になるといついつと

伊集院理子

子どもたちは、家庭から一歩を踏み出して、同年齢の友達との集団生活を幼稚園・保育所で初めて体験します。昨年度、久々に三歳児の子どもたちの担任となり、心を新たに、子どもたちが「はじめの一步」を踏み出す過程にじっくりつき合っていました。

新学期の子どもたちは、母親が帰ろうとすると大慌てで泣きだしたり、泣きはしなくても石のように固まって動こうとしなかったり、不安な気持ちを全身で表していました。初めて過ごす幼稚園は、子ども

たちにあって、とうてい自分の場所とは思えない所でありました。園での生活を重ねる中で、園の環境が、しだいに子どもたちの場所に変わっていきました。どのような生活を積み重ねて、子どもたちが園の環境を自分の居場所として受け止めていくようになったのか、一学期間の子どもたちとの生活を振り返ってみようと思います。

入園してから二週間が経ち、朝の受け入れがだいぶ落ち着いてきたころ、庭に出ていこうとする子ども

もたちも増えていきました。そこで思い切つて、周りにいる子どもたちを誘つて園庭の高台のほうまで出かけていくことにしました。私どもの園庭は、起伏があり、高台の部分を通称「おやま」と呼んでいます。三歳の子どもたちにとつて、「おやま」に出かけることは大変な遠出です。自分の背丈の四分の一ほどの階段を上るには、すべての力を集中させて、一步一步進んでいかなければなりません。うつそうとした樹木の中を通ることも、「おやま」までの道のりをさらに遠いものにしていたに違いありません。何段もの階段を上り終えると、ぱつと視界が開けます。明るい光に満ちた雑草園が目飛び込んできます。子どもたちは思わず走りだしました。そして、円を描くように雑草園を回りだしました。走っているうちに、子どもたちの力が、外へ外へと発散されて、それを補うように子どもたちの体の中から新しい力が生まれ出ているように思えました。

この日からほとんど毎日、子どもたちと「おや

ま」に出かけることを重ねていきました。

まだ自分一人では心もとなく、私の両手を求めて子どもたちが群がっている状況の中でも、「おやま」に出かける時は、脇に挟み込むようにして、ござを持つていきました。教師と手をつないでも、まだ不安でいっぱいな子どもたちは、毎日出かける前に、大好きなぬいぐるみを手に持ったり、おんぶしたり、手提げかばんにお気に入りのものを詰めたりして、自分を守つてくれるありとあらゆるものを身を守るための遠出となりました。

「おやま」に着くと、子どもたちは、それまで身を守つてくれた数々のものを次々と私に渡して、駆けだすのです。私は、ござを敷いて、子どもたちから預かったものを置いて、子どもたちと一緒に動くようにしていました。「おやま」には、雑草園だけではなく、さらに高くそびえ立つログハウスや築山があります。雑草園を走り回つて元気が出てきた子どもたちは、ログハウス登りに向かいました。一段

一段おっかなびつくり登っていく子どもたちの後に
ついて私も登りました。ログハウスの上は狭い場所
で、そこに座ると、必然的にそばにいる友達、教師の
存在を身近に感じる機会になりました。ログハウス
から見下ろすと、「おやま」が一望できました。「お
やま」で遊んでいる年長児、年中児の様子もよく見
えて、私が「ヤッホー」と声をかけると、子どもたち
もまねをして「ヤッホー」と声を出しました。大き
な声を出すことも、子どもたちの体の中から力を引
き出してくれました。

園という新しい環境の中で、教師や友達と一緒に
階段を上ったり、雑草園を走り回ったりして、体
中に力をため込んだり出したりしていくことで、入
園当初の不安な気持ちもしだいに外に押し出されて
いったように思えました。

「おやま通い」も回を重ね、ログハウス登りの足取
りもしつかりしてきたので、ログハウスから少し離
れた場所にごさを敷き、私はごさに座って、子ども

たちの様子を見守ることにしました。すると、子
どもたちは走り回ったり、ログハウスに登ったり、ほ
かのアスレチックに挑戦したりして、それぞれ思い
思いに動き回っては、ごさに座っている私の所に
戻ってきて、また出かけていくようになりました。

これまでの三歳の子どもたちとの生活経験から、
広い園庭の中でごさが子どもたちのよりどころとな
ることはわかかっていて、だからこそ毎回ごさを「お
やま」まで運んでいたのです。そのよりどころにな
る場所に、私が腰を据えてみたら、子どもたち一人
ひとりの動きがよく見えて、循環する動きがそれぞ
れに生まれていることが感じられました。その時、
基点（循環する動きの基となる場所）をはつきりさ
せて、そこに私がしつかり位置付くことが、子ども
たちそれぞれの動きをより引き出しやすくしていく
ことに気づきました。

五月中旬、初めてのお弁当の日のことでした。お

弁当の後の食休みに本を教冊読んでいると、「おやまに行こう」という声上がり、何人もの子どもたちがそそくさと靴を履き替え、「おやま」に向かおうとしていました。「早く、行こう」と子どもたちにせかされながらも、私は準備がまだできない子どもの手助けをしていたので、すぐには動きだせない状況でした。子どもたちは、なかなか動きださない私にしびれを切らして、何人かで「おやま」への階段を駆け上っていききました。「おやま」に続く階段道は幾つもあり、それまでの「おやま通い」の経験から、自分の保育室前に戻る一番の近道を子どもたちはわかっていて、その近道を通って次々に走り下りてきました。こちらもちょうど出かける準備が整い、子どもたちと一緒に走っていきこうとしたところ、一人の子どもが階段のたもとにある橋の所で、ダンゴムシを見つけて、その場で立ち止まりました。私もそれにつき合ってそこにとどまることになりました。先に走っていった子どもたちがまた近道を走り下り

てきたので、私は橋の所で子どもたちを出迎え、走ってきた子どもに次々ハイ・タッチをすると、子どもたちはまた駆け上っていききました。図らずも、私がとどまったことで、私のいる所が基点になって、子どもたちの循環する動きが生まれました。何回も走り回るうちに、子どもたちはどんどん元気になっていききました。

私自身、体を動かすことが大好きで、とにかく子どもたちと走る、登る、跳ぶ、踊る、何でも一緒に楽しむことをモットーにこれまで保育にあたってきました。久しぶりに三歳児との生活にどっぷり浸かってみて、一緒に動き回るばかりではなく、自分が基点になることで生まれる子どもたちの循環する動きに気づかされることがたびたびありました。



そんな体験が重なっていた時、津守真先生と津守房江先生の対談を本にした『出会いの保育学』の中の次の一文が私の目と心をとらえました。

(津守房江) ……私は、移動することによってぐるっと回ってまた戻って来る循環性が大事なのだと思います。外に行ってもまた元に戻って来るという存在のものが根底にあつての能動性だと思います。愛されて受け止められるだけではなくて、移動によって自分の場所があることを自分から把握することによって存在感がさらに確認できるのではないかと。

私は自分で勝手に、子どもたちの「存在感」というのは、落ち着ける場所があつてそこで安定して過ごす、じっくり過ごすなど、一か所にとどまることで導き出されるものだと思います。子どもたちの姿とこの一文から、「存在感」とは、とどまることだけではなく、移動して元の場所にも

戻っていく、その動きを自分からつくり出していくことを通して確かなものになっていくのだということに気づかされました。子どもたちは、新しく出合った環境に身を置きながら、自分から動きを起こして出かけていって戻ってくる動きを重ねることで、変わらなく存在している自分を確認していたのだと思います。

鬼ごっこのようにして追いかけると、三歳の子どもたちはよく、保育室の斜め前にある桜の老木の周りをぐるぐる逃げ回ったりしていました。さらに、元気が出てくると、園庭中央の花壇の所まで逃げていき、今度は花壇の周りをぐるぐる逃げ回っています。循環ということを意識に置いて、子どもたちの行動を見つめてみると、本当にいろいろな所で循環する動きをしていることに気づかされます。つい回りたくなるような変化のある園庭が子どもたちの循環する動きを引き出しているのだと考えます。

よくよく考えてみると、一学期の間、毎日のよう

に繰り返していた「おやま通い」も、子どもたちにとっては保育室と「おやま」を循環する動きになっていた、というように考えることもできません。本稿では、保育室内がどのようにして子どもたちの居場所になっていったかについては触れられませんでした、自分の思いに従って保育室で過ごし、庭に出かけていたり、保育室と園庭を行ったり来たりする行為の中で、保育室の空間や園庭のどこにも変わらない自分であることを体で感じて、園の環境を自分の居場所として受け止められるようになっていったのだと考えます。

ここで、再度、『出会いの保育学』から引用させていただきます。

(津守真) 『居場所』というのは単なる物理的空間とは違います。人が生きる空間です。守られて安

心できる空間、一人でいることも人と交わることもできる。自分から出て行ってまた戻ることができるところです。

そこにいる人を信頼できるとき、自分の存在が確かにされるのです。その中で子どもは成長することができます。

子どもたちにとって、担任である私がいずれも信頼に値する存在になって、一緒に動いたり、子どもたちがいつでも出かけていって安心して戻ってこられるような循環する動きの基点になったりしていくことが、子どもたちの存在感、居場所にもつながっていくのだということを、一学期の子どもたちとの生活から改めて確信しました。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

引用文献

津守真・津守房江

『出会いの保育学——この子と出会ったときから——』

ななみ書房 二〇〇八年